



**MORIOKA**  
ROTARY CLUB WEEKLY

第18回例会(11月16日)  
平成30年11月30日発行

クラブ事務所 岩手県盛岡市菜園1丁目10 会 長 坂本広行  
川徳デパート内 幹 事 藤村吉隆  
例 会 場 同上 TEL 019 (651) 1111(代) 会 報 吉田幸一  
例 会 日 毎週金曜日12時30分~ クラブ事務局 TEL 019 (653) 5682  
http://www.morioka-rc.jp/ FAX 019 (653) 5622

RI会長テーマ BE THE INSPIRATION:インスピレーションになろう…バリー・ラシン  
盛岡RC会長テーマ -80年の歴史と伝統、察いでいこう奉仕と友情-坂本広行



会員卓話

## 取材昔話Ⅱ

榎崎 憲二 君

新聞記者時代の話をしていただきます。昔々、昭和の時代の社会部記者の話です。笑い話としてお聞きいただけたらと思います。

まずは本当の笑い話です。1992年、東宝の砧撮影所からゴジラの着ぐるみが盗まれたことがありました。「ゴジラ盗まれる」と見出しをつけて夕刊で騒いだ記憶がありますが、数日後に多摩湖かどこかで見つかりました。遊軍席で警視庁クラブとの直通電話で一報を受けた記者が「ゴジラ見つかりました」と大声を上げたんです。それを聞いた当時の社会部長がなんと言ったか。「生きてたのか?」。まあ、安否次第でニュース価値は変わるのですが。皆から笑われてバツが悪そうに頭をかいたその部長はその後社長になりました。

警視庁との直通電話といえは私にはこんな体験があります。大阪の三菱銀行で立てこもり事件があった1979年、昭和54年1月のことです。史上稀に見る凄惨な強盗殺人立てこもり事件の衝撃は凄まじく、現場からは遠く離れている東京の社会部でもなぜか緊張感が漂い、日々が殺気立っていました。

その最中の夕刊帯だったのですが、直通電話が鳴りました。下っ端のサツ回りだった私が電話を取ると「品川の新幹線ガードに男がぶら下がり、

新幹線が止まっています」という一報でした。当番のTデスクから、すぐ現場だ、カメラ連れてお前行け、と指示が飛び、写真部に走ります。先輩カメラマンと二人でエレベーターに向かう途中で、現場の所番地をちゃんと聞いていなかったことを思い出しました。

私は、あわてて遊軍席に戻り、直通電話を持ち上げた、その時です。

「お前なにやってるんだ。現場へ行行って言ったら。行行って言ったら行くんだよ」

Tデスクはそう怒鳴ると私の背中を思い切り叩いたのです。平手だし、暴力と言えるようなものではありませんでしたが、子供のころから優等生だった私は、それまでの人生で人から叩かれたことは一度もありません。驚きました。

Tさんはカッとなったら怖い。そういう評判だったので抵抗は無駄。すみません、とだけ言って逃げるようにエレベーターホールに向かいました。近くまで行ったら公衆電話で警視庁に電話して場所を聞けばいい。携帯電話はおろか、自動車電話が導入されるのもそれから何年も後のことで、やっとポケベルが普及し始めた頃でした。

「Tデスクはとにかく熱いんですよ」

そう愚痴るとカメラマンから意外な言葉が返ってきました。

「写真部にはぶら下がり健康器があるんだよ。」

俺もぶら下がって見たことあるんだけどさ、あんなもんいくら頑張ったって10分がいいとこだよ、ぶら下がってられんのは。110番があったのは何分前だ？もうそろそろ限界だろうよ」

当時、横棒に両手でぶら下がる健康器具が流行っていましたが、言われてみると、まったく彼の言うとおりで。案の定でした。その頃既に、新幹線ガードにぶら下がった男の上腕筋は限界を迎えていたのです。編集局がある5階から1階の自動車部に駆け込むと、自動車デスクがご苦労さんと言いながら笑っていました。

「いま社会部から電話があったよ。男はガードからも降りたってさ。現場は行かなくていいって」

社会部といえば荒くれ者が多いと思われがちですが、いわゆる暴力沙汰はまったくありません。実は根は皆インテリなのです。私が叩かれたのは、後にも先にもこれがただの1回で、同様の話も聞いたことがありません。ただ、この経験があったからと言うことでは決してないのですが、私の方から不覚にも手を出してしまったことが、やはりただの1回なのですが、あります。1985年、昭和60年夏のことです。

群馬県の御巢鷹山に日航ジャンボ機が墜落したあの事故の発生時、私は大蔵省の5階にある国税庁記者クラブ詰めでした。500人乗りの旅客機が消息を絶ったという一報が入ったのが午後7時半前。東京本社からも社会部記者2人、カメラ1人という組み合わせで取材班が次々に長野、群馬方面に向かいました。私もクラブから呼び戻され、3番目の取材班として午後8時前にはハイヤーで社を出発しました。

夜間だったため、自衛隊のヘリコプターから群馬・長野県境あたりの山中で炎は確認されたものの、具体的な現場は特定できない。ぶら下がり男のときと同じく、このときも行き先不明のままの飛び出しでした。道々ハンディトーカーで社会部に自衛隊の捜索状況を問い合わせる。群馬県上野村か長野県南相木村の山中とまでは分かったが、

その先の具体的な地名の特定は難航し、深夜にいたっても不明でした。自衛隊がひとまず捜索を断念、夜が明ける午前4時に再開すると発表したのは日付が変わってまもなくでした。

その頃、私たち第3班は、群馬側で利根川の支流神流川の最上流あたりにいました。消防車や救急車、パトカーも多数先着していて、深い暗闇の中でのくるくる回る赤色灯が不安と焦燥をかきたてています。この場所は、その後、長戸沢と呼ばれ、墜落現場の御巢鷹山への登山口になった場所です。つまり私たちは既に現場に最も近いところにいたのですが、それは後になって分かることで、その時は知るよしもなかったのです。

午前4時に場所が特定されるまで、どこで夜を明かすかが問題でした。先発隊の動向が気になります。ハンディの傍聴で、第1班は県境の峠に陣取っていることが分かっていました。現場が長野、群馬のどちらに転んでも地の利がある最高の位置です。第2班は私たちと同じこの場所のどこかにいるらしい。しかし、同じここから出発するのは一番先に着くことはできません。

地図を睨んで、私は第三の場所を三国山と決めました。群馬、長野、埼玉の県境に位置する山で、近くに峠道があり、そこまでは車で行けそうです。峠からなら現場の煙が見えるだろう、見えたらそこを目指してまっすぐ歩けばいい。ギャンブルでした。運がよければ、というのは不謹慎な言い方かもしれませんが、現場に真っ先に着ける。夜の間に、いったん群馬から埼玉に南下して、そこから西に向かい、山梨県の韮崎あたりから北上して三国山を目指すことにしました。

私の班は、私より8年後輩のサツ回りK君とベテランカメラマンSさん、そして私の3人組でした。運転席の隣に地図を持ったK君を座らせ、その後ろに私、運転席の後ろにSさんが座りました。

地図上の直線距離では長戸沢から三国山までは2キロあるかないかですが、迂回路はざっと200キロはあったでしょう。車は山から町へ下り、また猛スピードで山道に入ります。もっと速くと気ばかり焦っていたときです。背もたれからのぞい

ているK君の頭が前後左右に揺れているのに気付いたのです。

「なに寝てるんだ！おまえ寝てる場合か！？」

私はそう言うなり、彼の頭頂部を、平手だったと思いますが、思い切りパシッと叩いていたのです。

東京を出て既に6、7時間が過ぎ、その間走りづめです。緊張から来る疲れもある。しかし、私には、500人乗りの飛行機の墜落現場に駆けつけようとしている新聞記者が眠くなるということが信じられませんでした。500人の命がどうなるか、どうなっているのか。それを一刻も早く突き止め、伝えなければならない。その使命感から来る重圧と戦慄に睡魔が勝っていいはずがない。許せない。

「ちゃんと起きてろ。ナビをするのがおまえの役目だろ。何のためにそこに座ってると思ってるんだ」

Tデスクと私は違う。Tさんは何かにつけ大声を出すし、怒った。私はもっと冷静で知的な人間だ。殴るという行為は同じでも、理由の重大性、レベルはまったく違う。長年そう思ってきましたが、こうして振り返っているうちに、そうとばかりは言えないような気がしてきました。事件・事故を前に逆上するのは社会部記者という人種に共通の病気です。

三国山近くの峠道に着いたのは午前4時少し前でした。既に夜は明けきり、快晴の空の下、二重三重に重なったのはるか向こうの尾根から、煙が上がっているのが見えました。さあ行くぞ。煙の方向にまっすぐ進めばいい。笹藪に突入し、背丈をはるかに超えるブッシュ漕ぎが始まりました。気付けば私はスーツ姿です。テレビで衝撃の一報を聞き、記者クラブを飛び出したのが遠い昔のこのようでした。汗ですっかり湿ってしまった上着を脱ぎ、腰のベルトにハンカチで結わえ付けました。

「もう無理です。私はもう歩けません。私を置いてってください。」

K君が泣き顔で訴えてきます。

「バカ言うんじゃないよ。遭難するぞ。ほら、しっかり歩け。ほかの奴らに負けてもいいのかよ」

さすがにもう手は出しません。K君の後ろに回り、背中を押してやりました。

幾つ目の尾根にたどり着いたときだったでしょうか。谷を一つ越えた目の前の尾根に飛行機の大きな水平尾翼が見えました。しかし煙が上がっているのはそこではなく、さらにそのもう一つ先の尾根からです。墜落機は、手前の尾根でバウンドし、千切れた尾翼をそこに残して次の尾根まで飛び、胴体を擦りつけて力尽きたようです。

よし、とりあえず原稿だ。今見ているものをさっと頭の中で文章にまとめる。ハンディを手に、さあ、原稿を吹き込もうという時です。第1班の記者の声が聞こえてきました。

「現着しました、現着しました。今から原稿を吹き込みます」

何ということか、第1班に先を越されてしまった。彼らは胴体着陸の現場から原稿を送っていました。生々しい見た目雑感に、ここから吹き込む遠目雑感が敵うはずありません。私は原稿を吹き込むのを諦め、先を急ぐことにしたのです。

私たちがその尾根に到着したのは結局午後2時半でした。朝の4時から10時間半、山中をさ迷ったことになります。夕刊の締め切りはとうに過ぎています。現場では自衛官や警官があわただしく動き回中、何人かの記者たちがひと仕事を終え、呆けたように立ちすくんでいました。ヘリコプターが轟音を響かせて次々に飛来し、ホバリングしては自衛隊や警察の資材を降ろしていきます。最後が報道各社の番でした。我が社のヘリもやって来て、お握りや飲み物が入った袋を降ろして去って行きました。3人ともただ無言でそれらを口に運んだのです。

以上の話は何の教訓もありません。愚直でがむしゃらだったなと思うばかりですが、それは社会部記者がそうだったというにとどまらず、もしかしたら昭和のあの頃がそんな時代だったのかも知れないと思ったりもします。

## 脳の活性

人に会うという事、誰かと会話をするという事は、物忘れや人の名前がすぐに出てこなくなった世代以降の脳の活性を維持するためには、本当に必要不可欠だと思う。

いくら薬を飲んでも筋肉の活性を維持出来ないように、脳も刺激を得なければその活性は極端にしぼんでしまうと考えている。

先日、社会保障を理解するためのセミナーに参加するため仙台に行ってきたが、懇親会にも参加して講師を囲んで5人程で懇談をして、初対面の人などの考え方や物の見方などを想像しながら話の中に加えてもらう機会があった。

同業や近い業種の方々に刺激を得て、脳の活性が一時的にしる、向上したことを後で振り返ってじんわりと実感した。

ロータリークラブは異業種の方々と毎週交流して活動する事で、血の巡りの改善にも相当効果があると感じているし、60代、70代と年齢を重ねるに従ってさらに有難味が増して行くようにも思われる。

「興味を持つことがとても大切です」とは先日のセミナーの講師の話だが、時間が経過する中で物事に興味を失っていく事の多いこの頃、60代になっても70代になっても何かに興味を見つけて物事を探求していくことに遅いという事は無いと思うので、これからも意識して続けて行きたいと思っている。

大平 騰一 記

### 例会報告

第18回例会  
平成30年11月16日(金)

12時30分 開会点鐘

- ・司会 坂本広行会長
- ・ロータリーソング  
(それどころロータリー)
- ・会長報告 坂本広行会長
- ・皆出席バッチ 長澤 茂君 (13年)
- ・誕生祝 千崎和夫君
- ・幹事報告 藤村吉隆幹事
- ・委員会報告

#### 【ニコニコBOX】

◆平井滋君…ニコニコというよりコマースナルです。

数年前に紫波の平井家住宅を職場見学いただいた後の秋のこん親会で、40年前の酒を味見していただいたのですが、その敷地内の商品保管用冷蔵庫の空スペースに在庫していた22年前1996年にびん詰した日本酒をいつ販売しようかと考えておりました。

熟成し、品質も良く、昨日から当カワトクのえびず講に限定で販

売しております。

「追想の1996～あの時君は若かった～」の商品名で、1升・税込1,996円です。

中国の紹興酒のような色と風味です。常温またはお燗でお楽しみ下さい。興味のある方はどうぞ。

#### ●メイクアップ

地区=堺田君。

水沢東R.C.=長澤君。

盛岡南R.C.=熊谷(祐)君。

クラブ委員会=檜崎・下道・吉田(明)・眞下君

#### 出席報告

会員数/77名

出席数/49名

出席率/67.12%

前々回/79.73%



#### プログラムのお知らせ

- ・11月30日(金) ゲスト卓話 後藤博一様(盛岡保護観察所所長)「保護観察」
- ・12月7日(金) 新入会員卓話 中村芳樹会員
- 14日(金) 年次総会・ゲスト卓話 下山寛会友
- 21日(金) 年忘れ家族会
- 28日(金) 年末休会
- ・1月4日(金) 年始休会

●本号編集担当/大平 騰一